The Interview

一日一日を大切に、人生の終点まで自分の足で歩いていきたいですね。

吉行あぐりさん

輝いて生きるためのメッセージ

朝の連続テレビ小説『あぐり』のモデルとして知られる吉行あぐりさん。96歳を迎えた今も、現役の美容師として働いています。「お客様が来てくださるうちはやめるわけにはいきませんもの」と語るあぐりさんに、いくつになっても輝いて生きるためのヒントについてうかがいました。

現在、お一人で美容室を開かれているそうですが、どんなペースで働いていらっしゃるのですか。

70歳を過ぎた頃から自分のペースで仕事をしようと決めまして、一人でやることにしたのです。ですからお客様も一人でやれる範囲で、長年おつきあいのある70歳以上の方に限らせていただきました。お年を召した方にとって、行きつけの美容室がなくなるのは困りますから。

いくつになっても仕事があるって、幸せなことですね。

それでも当時は40人くらいのお客様がいらっしゃったんですよ。でもいまはわずかになりました。長く生きていますと、みなさんのほうが先にお亡くなりになりますでしょう。寂しいものですね。

いまは予約が入った日だけ営業しているのですが、ほとんど道楽のようなものですね。でもお客様がお越しくださるうちは、やめるわけにはいかないと思って続けています。

仕事のない日はどんなふうに過ごされているのですか。また特に健康のために心がけていることがあればお聞かせください。

朝起きると、まず乾布摩擦をしています。それと、寝たきりになると困るので、毎日散歩をしています。でもこういうことを始めたのは、ここ数年なんですよ。それまで自分が年を取ったなんて思ったことがなかったものですから。でもさすがに96歳を越えましたら、歩くのが下手になりまして。やっぱり90歳とは違うなって感じています。

本を読むのが好きなので、仕事のない日は一日本を読んで過ごしています。お茶とかお華とか趣味でもあればいいのですが、なんにもないのです。小さいときからお稽古事が嫌いで逃げてばかりいましたので。きっと好きなことしかできない質（たち）なんでしょうね。

けれども仕事があるということは生きるうえで支えになりますし、とても素晴らしいことだと思うのですが……。

今ならみなさん、そうおっしゃってくださいます。でも私の時代は、女性が働きに出るなんてもってのほかでしたから。それに美容の分野は「女髪結い」などといわれ、仕事の地位も低かったのです。

でも戦後の苦しいときに、子どもたちを育てられたのは仕事をもっていたお蔭ですし、夫に先立たれたり、いろいろなことがあってもこうして生きてこれたのは、やはり仕事が支えになっていたからでしょう。ですから仕事があるって、幸せなことだと思います。

プロフィール◆本名／吉行安久利。1907年、岡山県生まれ。15歳で作家・吉行エイスケ氏と結婚。 上京後、洋髪美容師・山野千恵子の指導を受け、美容院を開設。1940年にエイスケ氏と死別後は、長男淳之介（故人）・次女理恵の二人の芥川賞作家、そして長女で女優の和子を育てあげる。自伝『梅桃が実るとき』がテレビドラマ化され話題となる。

しかし、長い間にはさまざまなご苦労もあったと思います。ここまで仕事を続けてこられた秘訣があればお聞かせください。

人並みの苦労はありました。でも私の場合、辛いとか苦しいとかあまり感じたことがないのです。単純なんでしょうね。人がどう思うかなども気になりませんし、何かあってもそれはそれで仕方のないことと思って受け止めてしまうのです。

でもここまで続けてきたのは、やはりこの仕事が好きだからなのでしょう。

それと私はとても不器用な人間で、人が3日で終わるところが、納得するまでやろうとすると、1週間も2週間もかかってしまう。だから一つのことをやるしかなかったんですね。器用な方は経営のほうに走ってしまわれて、ご自分でなさらなくなったりするものですが、私はただ働くだけ。ずっと職人でいたことがよかったのだと思います。

戦後、日本は豊かになり、そしていま高齢社会を迎えていますが、女性も男性もいきいきと生きられるためには、どんなことが大切だとお考えでしょう。

それぞれの生き方がかなえられることだと思います。それにはやはり自分にしかできないことを一つ持っているとよろしいのではないですか。

私は戦後世の中が変わって、女性は得をしたと思います。私の時代は女が上の学校に行くなどということはめったに許されませんでしたので。私の女学校でも高等師範に入った方は2名だけでした。

それがいまは女性もいろいろなところで活躍されている。とても素晴らしいことだと思います。

いくつになってもいきいきと生きるためには、あまりよくばらないことですね。これは私も痛感していることなのですが、年をとってからあれこれしようというのは大間違いです。若いとき、それもできるときにやっておくことが大事だと思います。

最後に、これからの夢をお聞かせください。

上手に死にたいですね。氷がとけるようにすうっとね。

でも私、この年になっても死んだらどうなるかなんて一度も考えたことがないのですよ。ただそのときが来るまで自分の足で歩けて、周囲の手をかりずに生きていきたいと願っています。

明治、大正、昭和、そして平成と、とにかく長い年月の間にはいろいろなことがありました。これからもどんなことが起ころうと、これまで通り、その日その日にあったことを大切に、精一杯自分の力で生きていきたいと思います。

若いとき、それもできるときにやっておくことが大事だと思います。

通信員レポート

あぐりさんのお話をうかがって

●その日その日を大切に生きていきたい

通信員◆伊藤仁実さん（写真右）

お会いするうちに、心も身体もぬくぬくと温まっていくのを感じました。日課のお散歩の途中で、朝顔の芽を見つけ、毎日お水をあげて見事に開花させたというあぐりさん。人一倍愛情にあふれた方なのでしょう。なんだか自分も周りにやさしい人間になれるような気がしました。私個人としては、年金問題等、老後の不安はつのるばかりでしたが、ゆく先を心配して暗くなるよりあぐりさんのようにその日その日を大切に一生懸命生きたいと思います。

●あぐりさんの颯爽（さっそう）とした人生に感銘

通信員◆佐久間美希さん（写真左）

人と競争したり、人がどう思うかなどということを気にしてこなかったとおっしゃるあぐりさんの96年の人生は、明治の日本の女性として、独立した自由人という印象を持ちました。結婚をし、家庭を持ち、美容師として家族を支えてきたというお話からは何かふっきれたすがすがしさ、温かさ、穏やかさが伝わり、こういう人生を送りたいという感銘を与えてくれました。

※通信員:公募により「You&Me～夢～」の編集に関わっている市民です